

## 『大同コレクション』と アフリカンプリント

大同マルタ染工(株)は2008年3月に工場を閉鎖した。会社がツブレルということは何もかも……土地、工場、建物、機械は勿論、技術、製品、名声、歴史、すべてが消えてしまうことである。大同は8年前にそのすべてを失った。それから3年後、奇跡的に数個のほこりだらけの段ボール箱に詰まったプリント見本が見つかった。それは大同の輸出捺染最盛期(1960年代)に、営業部が意匠開発のため世界中から集めたプリント見本だった。

当時の大同のプリント輸出比率は80%以上、そのうちアフリカへ40%近く輸出していた。それ故集めた見本は「ワックス」、「ジャワプリント」、「カンガ」等のアフリカンプリントが中心である。その他、「バチック」、「サリー」、「イカット」、「タパ」、「モラ」、「アロハ」、「中南米の民族衣装」と多岐にわたり、縫製品55点を含め、サンプル数は合計341点。しかし、残念なことに、1960~70年代、毎月アフリカへ100万円以上輸出していた肝心の大同のプリント見本が、ほんの僅かしかない。

驚き懐かしさと共に、大同マルタ会(大同OB会)が1年掛かりで分類整理し、明細書を作り、全部写真に撮った。そして、これを何とか業界、学会に役立て保存したいと、その明細書と写真集を手分けして大学、研究機関等に送付した。

これが『大同コレクション』である。

『大同コレクション』に最初に声をかけて頂いたのは、「京都工芸繊維大学 文化遺産教育研究センター」だった。並木誠士教授・青木美保子先生・上田文先生が来られて目を通してもらった。『保管する前に展覧会をやったら、場所は京都工芸繊維大学 美術工芸資料館を用意しましょう』と、願ってもないお話であった。欣喜雀躍、大同の名前を残そうと力を入れた甲斐があった。

企画・展示は美人の両先生の手で見事に進められ、素晴らしい”テーマ“と斬新な案内ポスターに感心させられた。さすが大学である。

こうして『京都からアフリカへー大同コレクションに見る 1960年代京都の捺染産業展』が、2013年5月27日~8月10日 京都工芸繊維大学 美術工芸資料館 2階 4室全部を使って開催された。京都新聞、読売新聞、織研新聞、繊維ニュース、でも大きく取り上げられ、学会・業界の注目を集めた。

期間中の有料入場者は延べ1,600人の盛況だった。

戦後の経済復興期に、京都から世界へ、繊維産業の活路を見出そうとした日本の当時の様子を伝える貴重な資料となった。そして同時に、プリント染色技法やデザイン・柄の面白さ、それが京都で捺染されアフリカへ大量に輸出されていたという意外性に感嘆された方が多かった。

『大同コレクション』はこの後、技術部研究ノート、1962年発行の『大同20年史』他の文書、当時稼働中の染色仕上機械の写真などを追加して、全資料を 京都工芸繊維大学 美術工芸資料館に寄付し、保管して頂くことになった。

### アフリカンプリントについて

今日のアフリカンプリントの起源は16世紀オランダ東インド会社がアフリカへ持ち込んだインドネシアの「バチック(ジャワ更紗)」といわれている。「バチック」は手染めのワックスプリント(臙纈染め)で、数量が限られ、とてもアフリカの需要をまかなえきれない。そこでオランダは最も手のかかる、ワックスで模様をおく部分を捺染機で印捺し、その後、染色する方法を開発した。これをヨーロッパ本国で生産し、アフリカへ輸出したのである。これらは『リアルワックス』とよばれている。

このあとを追って、日本などからアフリカへ輸出されたものは、ワックス防染でなく、ローラー捺染機でオーバープリントしたものである。オランダ、イギリス、スイス等のヨーロッパ製『リアルワックス』に対し、後発の製品は『イミテーションワックス』と呼ばれた。

名前のイメージは悪いが、ワックスのひび割れをロールの彫刻でそっくり表現し、配色はナフトールなど近代染料で赤・黄・紺の鮮明な濃色を使い、化学防染の技法を使ったなかなかの製品である。なにより大量生産が出

来てコストが安く、数量は断然多い。しかし、価格は雲泥の差があった。

アフリカプリントにはその他に『ジャバプリント』や『カンガ』がある。

『ジャバプリント』はジャワ島でブロックなど手製のプリントから、今では一部機械化しオランダなどヨーロッパで多く作られる。ワックスを使わないが、鮮やかなグリーンやレモンイエローの原色鮮やかな、高級プリントである。

1960年代前半、大同はアフリカ向け主力の「イミテーションワックス」が東南アジア各国や現地工場の安値競争で苦戦をしいられた。そこで高級品の開発をめざし目標にしたのが、オランダ ブリシンゲン社の「グリーン地ジャバプリント」だった。そして開発したのが、起死回生の新製品『グリーンワックス』である。

『グリーンワックス』は、地色の濃い深みのある鮮やかなグリーンが特徴で、ワックス調のボーダーで縁取りした、素晴らしいジャバプリントである。グリーンの色は、ナフトール染料AS-Gの「濃い黄」とフタロゲンブルーIF3Gという金属錯塩染料の「ターキッシュブルー」との配合で作られ、捺染後発色する。彫刻技術と化学防染（返し）技術を駆使した、大同独自のアフリカ向けヒット商品である。1960年代後半からアフリカ向けは全部『グリーンワックス』に切り替え、10年間市場を独占した。ロットは1柄1万ヤード以上と大きく、大同ローラー、ロータリー捺染の主力製品であった。しかし、この染料が公害問題で1977年製造中止となり、僅か10年で『グリーンワックス』は、二度と生産できなくなった。その後、これに代わる商品はなく、併せて現地生産の急拡大、

現地の外貨不足、円高による価格の高騰などで、大同は1980年アフリカ市場から完全に撤退した。



大同のグリーンワックス

160 cm X 110 cm

『カンガ』



ワックスは主に黄金海岸から陸揚げされガーナ、ナイジェリア、などの西アフリカへ輸出されたのに対し、カンガはケニア、タンザニア、などの東アフリカへ輸出されていた。

大きさは150cm×110cm。2枚1組で、1枚は腰に巻き、1枚は頭に巻いたり、赤ん坊を背負ったりなどに使う。大きなボーダー柄が特徴で布の下部にスワヒリ語の言葉がプリントされている。

ローラー捺染機で加工する場合は、写真のように大きなローラーと大きな捺染機が必要で、輸出していたのはオランダと日本では大同染工と昭南工業ぐらいだった。

## 『大同コレクション』のその後

『京都からアフリカへ』の展示会は、テーマが魅力的で、折からのアフリカブームに乗ったこと、大学で立派な報告書が作成された事もあって、学会・美術館・研究機関の反響も大きかった。以下、その後について、今年の「大同マルタ会のブログ」に載せた報告を、転載、補足する。

### オランダで見つかった 大同プリント

一昨年、福岡市美術館で「更紗の時代」の展示会に『大同コレクション』が展示された。その縁で正路佐知子学芸員から、先日突然、お会いしたいと連絡があった。これがまた、嬉しいビッグニュースで、久しぶりに驚き興奮させられた。

彼女は「更紗の時代」の展示会以降、担当した「日本が生んだアフリカの更紗」に熱が入った。そして、世界の輸出捺染の研究・調査のため、オランダの『フリスコ社』まで出かけた。そこでの収穫の報告を兼ね、聞きたいことがあるというのが用件だった。

『フリスコ社』は100年以上の歴史を持ち、現在もアフリカプリントの世界一のブランドである。前身は大同のアフリカ輸出最盛期の頃、よく耳にした、アフリカプリント最高の技術を持った『ブリシンゲン社』である。リアルワックス、ジャバプリントなどを最初にアフリカへもっていき、確固たる地位を築いていた。

『フリスコ社』の膨大な見本は年代ごとに整理されていて、そのデザイン管理もすばらしいそうだ。彼女は日本のアフリカ輸出を調査する目的で1960～1970年代の見本を丹念に見ていた。そこに他社製品という一括りの山を見つけた。誰も見る者もなく、フリスコの担当者も忘れていたそうだ。それを片っ端から写真に撮った中に、面白いものを見つけた。大同の「グリーンワックス」によく似た色・柄の見本があったので、それらを確認して欲しいと、次々見本の映像を見せられた。

出てきた沢山の写真を見て驚いた。「／なんだこれは／どれもこれもみんな／『グリーンワックス』ではないか!!・・・」。グリーン色彩、特徴あるボーダー、見覚えのある柄域、まず、間違いはない。耳ネームに『Daido』の名前はなかったが『Real Java』、『Grand Java』と入ったものがあった。その他、大同捺染らしい『ブリード捺染』や、ロータリーのアフリカ向け『ファンシイプリント』もあったが、50年前のあやふやな記憶では役にたたなかった。

どちらにしても当時、天下の「ブリシンゲン社」が『グリーンワックス』を強力なライバル視し、こんなに大同見本を集めていたとは!!彼らも大同に、注目・研究していたと思うと愉快だった。当時の大同の営業報告によれば、開発してから数年間、大同のジャバプリントはアフリカ市場の人気を独占した、と。それに嬉しいことに大同製品は『リアルジャバ』と呼ばれ、短期間ではあったが、アフリカ中を席捲したと。それを裏付けるような、なつかしい、嬉しい、みやげ話でした。



正路佐知子氏提供 — — フリスコ社にあった 大同グリーンワックス

## オランダで見つかった 大同プリント — 続き —

昨年 8 月、「糸・布・衣の循環史研究会」の『大同コレクション見学会』が京都工芸繊維大学 3号館 でありました。この研究会は、国際的な研究会で各国の大学教授、準教授、大学研究員が集まります。当日も、英国 ウォーリック大学、米国 カリフォルニア大学、カナダ アルバータ大学、イタリア パドヴァ大学、ベネチア カフォスカリ大学、シンガポール大学、法政大学、長崎大学、立命館大学、京都工芸繊維大学、東京国際大学、和光大学、共立女子大学の錚々たる面々が来京しました。講師として 当方も呼ばれたが、2/3 は女性である。活発な質疑応答はやはり「グリーンワックス」に集中したが、学会で「アフリカプリント」がこんなに話題になっているのが嬉しかった。

そのつながりで、今回 法政大学の杉浦末樹教授が ヨーロッパ出張の際、上田先生から「オランダで見つかった 大同プリント」の原稿が送られていて、グッドタイミングで情報が伝わった。オランダ語の堪能な杉浦教授は、「フリスコ社」を訪問され、オランダ側から見た「アフリカプリントについて」調査された。上田先生は『大同コレクション』のフリスコ社製と思われる写真を送り、確認をとってもらうことも出来た。

フリスコ社は大同のことをよく知っていた。1960 年、社員と名のらずに大同を訪問し、その年、写真彫刻技術を導入することも知っていたそうだ。フリスコ社に残っていた報告書に「大同は日本のベストカンパニーである」という文言もあり、高品質、生産性に注目していた。—— と。詳しい話は 6 月 4 日 立命館での研究会の講演会に発表された。

研究ワークショップ：20 世紀日本ファッション産業の仲介者たち

主催：糸・布・衣 循環史研究会、立命館大学アート・リサーチセンター

日時：2016 年 6 月 4 日（土）13 時 00 分～

会場：立命館大学アート・リサーチセンター（京都市北区等持院北町 56-1）

基調講演

阿部武司（国土館大学）日本繊維産業の構造変化—綿業を中心に

第一部 アフリカプリント生産の仲介をめぐる

上田文（京都工芸繊維大学）

京都のアフリカプリント生産と西澤株式会社

上岡学正（大阪芸術大学）

オランダから京都へ：アフリカプリントの生産流通比較

杉浦末樹（法政大学）

オランダは日本のアフリカプリントをどう見たか

～ブリシゲン社の 1960 年の調査報告書から～

正路佐知子（福岡市立美術館）

カンガに見られるオランダと日本の関係

上岡学正先生は、持参されたオランダ製のプリントサンプル全部を『大同コレクション』に加えて下さいと 京都工芸繊維大学 美術工芸資料館に寄付された。

杉浦先生は、『オランダは日本のアフリカプリント産業をどう見たか』のテーマでフリスコ社（旧ブリシゲン社）で見つけられた 1960 年の極秘日本調査報告書から、ライバル会社の視点で日本のアフリカプリント生産・流通組織 と当時の日本とオランダの立つ位置、関連性や日本の力量に注目していたと話された。

上田先生は、この研究会の続きで、7 月 杉浦教授・鈴木圭子立命館大学教授等とカナダのアルバータ大学に行かれ、「京都のアフリカプリント」について英語で講演された。『大同コレクション』もいよいよインターナショナルになってきた。

## 『 緑色 』と『 赤色 』

“リオ五輪”は前評判に反し、素晴らしかった。日本選手の活躍もさることながら、目についたのは、『緑』・『赤』・『黄』の原色である。各国の国旗がはためき、躍動するユニホーム、南国の意匠、実にカラフルである。当方、ここ数年夢中で追っかけた「大同コレクション」の“アフリカプリント”が重なった。強烈な太陽のもとに、『緑』『赤』『黄』の原色が映える色彩に感動させられた。

京都工芸繊維大学の上田先生が 7月 カナダのアルバータ大学での講演で、「大同コレクション」を紹介され、京都から素晴らしい「アフリカプリント」を大量に輸出していた と発表されると、驚きの声が上がったそうだ。日本の穏やかな気候風土、とりわけ雅やかな京都の意匠と アフリカへ向けて開発した原色の強烈な意匠とが、カナダのデザイン研究者には、結びつかなかったのが わかるような気がする。

さて、先日 緑と赤 について、生物学者（福岡伸一）の面白い話が朝日新聞に載っていたので紹介する。

緑と赤。正反対に見えるこの2色はきわめて近い色なのだ。化学構造で見るとそっくりである。緑と赤の色素は、同じ構造を持つ分子（ポリフィリン環）の中心にある金属イオンが、「マグネシウム」か「鉄」という点が違う。だから物理学的にいうと、赤色から反射される光と緑色から反射される光は互いにきわめて似た光になる。

霊長類以外の哺乳類、たとえば ネコ や イヌはこの光がどちらも同じように見える。つまり赤色と緑色を区別できない。そのかわり彼らは暗がりでも エサ を見つけたり、敵や味方を区別できたり、明暗の感度が高い眼を持っている。

どうして霊長類は、わずかな光の差を見分け、そこに緑と赤という大きな色の違いを知覚できるようになったのか。それは彼らがすみかとした森の環境と関係している。折り重なる緑の枝葉の中から、赤い木の実や熟した果実を素早く見つけることが、生存の上で有利に働いた。あるいは個体間のコミュニケーションが発達するにつれ、顔色の微妙な変化を読めることが役立ったのかもしれない。

かくして我々人間は、今日、カラフルな世界を享受し、芸術やファッションを楽しむことができるのである。……………